

高すぎた代価

来る日も来る日も一日中、タイム・リドリーはキリとハンマーをせっせと動かしながら、ツギを当てて繕う仕事をしていた。彼の商売は靴直しである。ずっと昔のことだが、若気の至りからか、彼は小さな荷物を肩にかけて故郷の村を飛び出し、華の都ロンドンのシティーで一旗あげようとしたことがある。(一) 愚かにも当時は、うぶな彼の心にひらめいた意味での出世の道が結局は見つからなかったにせよ、とにもかくにも三度の飯——酸いも甘いもかみ分けるようになった晩年には、それさえいただければ御の字と言える幸せ——にさえ恵まれないのがどういふことなのか、まったく理解できていなかったのだ。これまで歩んだ六十年で、(二) 彼の頭には霜が降り、額には深いシワが刻まれ、歩く足取りも心もとなくなってしまう。タイムの姿を見た者は、間違いない、実際よりずっと老けていると思っただけだ。というの

も、彼は時の経過とともにボコボコにされただけでなく、昔は頑丈な男だったのに、長年の悲しみという圧力が重くのしかかり、腰も曲ってしまっていたからである。

ロンドンに出たリドリーはすぐ恋に落ちて結婚した。それから十二年後に妻はひとり娘を残して亡くなった。彼は最愛の娘に幸せな未来を作ってやろうと昼夜を問わず働いたが、結局は失望と悲哀に打ち砕かれただけだった。娘もまた同じように早まった結婚をしてしまったからである。それは父の意思に逆らった行動であったが、彼は娘の望みがどんな些細なものでも拒む気になれなかった。しかしながら、その結婚の結末は彼が懸念していたとおりになった。不届き者の亭主は次第に食いつぶぐれ、飲んだくれとなり、犯罪に手を染めたため、かつては明るい目をした快活な少女だった娘も、悲しみと恥辱に耐え切れず命を落としてしまっ

ジョージ・ギッシング(作)
松岡光治(訳)

たのだ。ありふれた話——悲しいかな、関係者以外には面白くも何ともない話——である。

長きにわたって未来を夢のあるものにしてきていた数々の希望が瓦解してしまった今、タイムに残されたものと言えば、十二歳の孫娘だけであった。彼は毎日何時間も働いたが、その間この子はずっとそばに座っていた。時には奇妙な考えや空想に基づいて何やらベチャクチャと話すこともあったが、たいていは静かにじつと座ったまま、よく動く目で老人の手の動きを追いかけ、仕事の様子を楽しんでいるようだった。ルーシーは年の割には小柄で体も弱かった。それもそのはず当たり前だ。走り回った経験も他の子供たちと遊んだ経験もなかったのだ、それがどういふことなのか分かっていなかったのだから。六年前に母親が死んでからというもの、この子はいつもタイム爺さんの唯一の話し相手で、始終うす暗い仕事場に座っていたため、精神的に早熟な子に育つ一方で、肉体的には運動不足のせいで虚弱な体質となり、持ち前の体力も衰えてしまっていた。しかし、ルーシーの顔はそれほもう美しかった——事実、母親よりも美人だと老人はよく思ったものだ。だが、娘と孫があまりにも似ていたので、たびたび心の中で陰鬱だった六年間を飛び越えて過去に舞い戻った彼には、そばに実の娘がいるように思えた。タイムは自分自身の子供時代の日々を振り返り、大人になってからは子供の成長と束の間の繁栄

を、そしてその死を見届けたことを思い出した。そして今度はまた、自分が永久に目を閉じたとき、明るい未来が訪れるはずの孫娘がその場にいないというのは、考えてみると何とまあ不思議なことではないか！

リドリー老人の仕事場へ行くには街路から地下に通じる階段を降りなければならなかった。仕事場は様々な会社の事務所が入った大きな建物の地下にあったのである。この仕事場の入口の前をいつも通つて、それぞれの事務所へと向かう人々の中で、さながら商標のように店先に並べられた古い靴に一瞬なりとも気を留める者は一人しかいなかった。それはページ氏という気さくな感じの老紳士で、その慈悲深い顔立ちは善良な心の持ち主であることを雄弁に語っていた。職業は建築家で、リドリーの仕事場と同じ建物の三階に事務所を構えていた。ページ氏は、行く手にチャンスが転がっていれば、単に慈悲を施して満足するだけでなく、わざわざ救済する機会を求めてまでも、困った人を見つけようとする類まれな御仁であった。彼は事務所を構えると、すぐさま靴直し屋の仕事場に通じる石の階段を降りて行き、いろんな口実をつけてタイムの業務状況を詳しく教えてもらった。その結果、ページ氏はちよつとした仕事を老人に与えてあげるようになり、そうした仕事が無くなると、よそから仕事をわざわざ手に入れてやるようになった。こうして物質面で友人を助けてやったのである。

ティムは、ページ氏の自分に対する好意が際限もないことにまったく気づいていなかったが、それでも相手の好意を何となく感じて感謝の念をそれなりに抱いていた。一方、ルーシーの方は生まれつき内気な子であったが、お爺ちゃんにとっても優しくしてくれる老紳士に対しては、何のためらいもなく背伸びをし、かわいい小さな唇で彼の大きな、もじゃもじゃした口ひげにキスをしたものだ。建築家もまたこの子のことが大好きで、おませな美しい娘とわざわざ言葉を交わすために、靴の革の臭いでむっとする地下室にちよくちよく来ていた。

ティムは孫の姿を見るたびに溜息をついていた。富を欲したことがあるとすれば、それは彼にもよく分かっていたように、ルーシーがやせ衰えて行くだけの、この大都会から連れ出すことができると考えたからである。彼はしばしば田舎についてできるだけ上手に説明しながら孫に話して聞かせてやった。実際、彼自身が最後に田舎を見たのはずいぶん昔のことだったので、その記憶はとても曖昧になっていた。孫の方も想像の世界で美化していた田舎の景色を実際に見に行きたいという不思議な気持ちにとらわれているようだった。

「お爺ちゃん」と、ルーシーは老人の顔を見上げながら、よく言ったものである。「もう一回、あたいに話してみても、田舎のこととか、丘や川のこととか、お牛さんが草を食べたり、太陽がキ

ラキラ輝いて、きれいな花がたくさん咲いて黄色になつてる牧場のこととかよ。もう一回、ゼーンぶ話してちょうだい！」

すると、ティムは頬に流れる涙を拭うために顔をそむけながら、できるだけ上手に話して聞かせた。熱心に耳を傾けていた孫は大喜びで青い目を輝かせ、話が終わると深い溜息をつきながら、「お爺ちゃん、いつかそこに行けるわよね?」と言った。

「そうさな、ルーシー、いつかな」とティムは答えたが、少女から「いつなの?」とせきたてられると、うんうんと首を縦に振るだけで、時おりポケットに手を入れ、そこに入っている数枚のコインを数えるくらいしかできなかった。

リドリー老人は孫の願いに心を痛め、何時間も悲しい思いをしていた。孫もまた、その願いをかなえようとする祖父の具体的な計画を何か見つけようとして、さらに彼の心を悩ました。しかしながら、結局は何も見つけることができなかった。祖父の稼ぎは家計上の出費をかううじて補う程度のもので、それだけでは短期間であってもルーシーしか田舎へ行かせることはできなかった。また、田舎に行っても孫の面倒をみてくれる知り合いなどいなかった。

* * * * *

ある日のこと、リドリーはいつものように例の問題で頭を悩ませながら、前の日にページ氏が置いて行ってくれた二足のブーツを修繕していた。たとえ頭を悩ませても、その結果は相変わらず無益なものだったが、だからと言って彼の手が止まってしまい、ちゃんとした仕事ができないなどということはなかった。実行不可能な計画に頭をめぐらすのを止めてしまった時には、すでにブーツの修繕は終わっていた。ちょうど正午頃だったので、上得意の客に対してはできるだけ時間を守りたいと思っていた老人は、ブーツを持って階上にあるページ氏の事務所まで走って行くことにした。それで、ルーシーには「すぐ戻るからな」と伝えて、仕事場をあとにした。

建築家の事務所の前まで来ると、タイムは扉が少し開いているに気づいた。ノックをしたが、返事がない。彼はブーツを持って帰りたくなかったので、事務所に入って見える所にブーツを置いて行くことにした。なぜなら、この建築家の場合は、確実に支払いをもらうために待っている必要などなかったからだ。それでタイムは中に入って周囲を見渡した。誰もいない。彼はブーツを見えやすい所に置いて引き下がろうとした。ちょうどその時のことだ——運が悪いことに、陽光を浴びてキラキラ輝いている金貨の山に、彼の目がたまたま留まった。その光景を前にして、一瞬、彼は体が硬直するのを感じた。頭がくらくらした瞬間、あり

とあらゆる希望と願いと空しい計画が彼の頭をよぎった。同時に彼の心を襲ったのは、ついに最大の願いをかなえる機会が訪れたという思いであった。

リドリーは訴えかけるような眼差しで自分の顔を見上げるルーシーの青ざめた顔を目にし、「お爺ちゃん、いつになったらそこに行けるの？」と何度も繰り返される、胸を引き裂かれるような質問を耳にした。すると、突如として悪寒が体中に走り、次の瞬間には頭がくらくらし、喉がからからになるのを感じた。理性的に考えることなどできず、矢継ぎ早に生じる強烈な感情にとらわれてしまった。どの位のあいだ身動きせず立ちつくしていたか分からない。あとで考えてみると、長い時間のようにも思えたが、実際にはせいぜい一分ほどだったに違いない。やっと彼は本能的に周囲を見渡した。近くには誰もいない。さっと一歩前進し、次の瞬間には両手でお金をつかんでいた。

老人は激しい興奮で震えながら部屋から立ち去った。廊下に出て足早に去ろうとしていた、ちょうどそのとき別の部屋の扉が開いてページ氏が出てきた。ページ氏はいつもの温厚そうな笑みでリドリーを迎えてくれ、「事務所に来たのかい？」と尋ねてくれた。靴直し屋は干からびた口で懸命に返事をしようとした。「事務所にはブーツを置いてきたところですよ」と必死に言おうとしたのだが、舌がその役目を果たしてくれず、自分でも何を言っている

のか分からなかった。ページ氏も相手の奇妙な態度に気づいてしまい、「気分が悪いのかね？」と尋ねた。しかし、この時にはタイムも自制心をかなり取り戻していたので、「今日はずっと体調がよくねえんで」と答え、それからブーツについて言うつもりだったことを繰り返して言い、きびすを返して「失礼いたしやす」とつぶやきながら急いで階段を降りて行った。

仕事場に戻ったリドリーにとって最初の心配事はお金の処理であつた。建築家はお金がなくなつたことにすぐ気づき、盗まれたと間違ひなく思うはずだ。ルーシーは座つて物思いにふけており、祖父の存在に気づいていない。仕事場の一番奥の隅へ行つて熱心にお金を数えてみると、ソブリン金貨(三)が十枚あつた。喜びのあまり心臓の鼓動が聞こえるほどだ。お金をすべて一枚の紙に包むと、その包みを古いブーツの中へ慎重に入れ、それを部屋の暗い隅に置いた。これで、ともかく、窃盗の告発を受けるようなことがあつても、大胆不敵に否定すればよい。彼は発覚するかどうかを運に任せようと思つた。

リドリー老人は作業台へ戻り、この上ないほど心を動揺させながら仕事をした。突然、聴覚が動物並みに研ぎ澄まされたような気がし、外の歩道を行き来する人の足音がことごとく、自分を逮捕するために近づいてくる人の足音のように聞こえた。孫に話しかけられても聞き流すだけで、彼は気が狂つたように仕事を続け

た。しかしながら、午後になつても誰一人やつて来ない。いつしか地下室も暗くなり、店を閉めて帰り支度をする時刻になつたが、まだ通りに出る勇気が出なかつた。とうとう外もほとんど真つ暗になつた。建築家はとくに事務所を出て帰宅したに違いない。そう思つた彼はやつと腰を上げ、震えながら宝物の安全を確認してから、ルーシーに仕事場から出る準備をするように命じた。すぐに少女が片付けを済ませたので、暗闇の中、二人は手を手をとつて家路を急いだ。

* * * * *

次の朝、タイムは孫娘と朝食をとりながら、「ルーシーや、今日は仕事場に行くのはやめよう」と言つた。

「やめるの？」いぶかるような眼差しでルーシーは祖父を見上げた。

「そうじゃよ。休みをとろうじゃないか」

「じゃあ、何するの、お爺ちゃん？ 今日日は日曜じゃないよ。礼拝に行かなくてもいいし、どこ行くの？」

「田舎に行つてはどうか？」と、タイムは孫を引き寄せ、金髪の巻き毛に片手を置きながら尋ねた。驚いて何も言えず、ただ自分をじつと見つめる孫の大きな青い目にたじろいで、彼は体を

震わせた。

「でも、行けるの、お爺ちゃん？ ホントに本気？」

「本気じゃとも、ルーシー。さっそく行くとしよう。すぐ荷物をまとめて、それから駅へ行けば、一時間もせんうちに田舎に到着してるさ」

ルーシーは両手をたたき、老人の首に両腕を巻きつけて何度もキスをした。喜びのあまり彼女の目には涙があふれ、タイムが田舎へ持つて行かねばならぬ荷物を包む手伝いができるほどに、自制心を取り戻すにはかなりの時間がかかった。リドリーは仕事場のこと、そこに残して行く商売道具や品物のことを考えたが、取りに戻る勇気はなかった。孫の方は、前途に待ち受けるもの以外は眼中になく、想像をめぐらして楽しむことで忙しかったので、どのくらいロンドンを離れることになるのかといった質問もしなかった。一時間後には準備が整い、リドリーは大きい方の包みを、孫は小さい方を抱えて、粗末な下宿を出て行った。

ちよつと尋ねただけで探していた目的の駅はすぐに分かった。リドリーは生まれ故郷の村へ行くことに決めていたのだが、そこまでの旅費がはたして自分に出せるかどうか少し心配だった。というのも、初めてロンドンに出てきた時の記憶があいまいだったので、その時に旅した距離がとても遠く感じられたからである。しかしながら彼は安心した。実際は村まで五十キロも離れていな

かったし、このたび手に入れたお金の額を考えると、三等車の切符の値段なんて、大人の自分と半額の子供の分を足しても、大したこととはなかった。

まもなく二人は汽車の座席に着き、大都会の玄関口をふさいでいる人間や馬車の混沌とした往来の中を目のくらむ速度で抜けて行った。ルーシーはほとんど一言も発さなかった。ただ座ったままで、驚いたように客車の窓の外をじっと見つめている。時々リドリーが目をやると、彼女はまるで新奇なものに心を圧倒されて疲れてはてたかのように、両目を閉じて座席に寄りかかっていた。線路の両側の視界をさえぎっていた大きな建物群も徐々になくなり、それに代わって長い列をなす一軒家がたくさん見え始めた。それはルーシーが今まで見たこともないような、きれいな、立派な家々だった。

幼い娘は感きわまつたような興奮から少しずつ回復しているように見え、か細い小さな指で祖父の手をつかむと、熱心に話や質問を始めた。時々対向列車がびゅーっとやって来ると、恐怖におののくかのように両手でさつと顔を隠したが、列車が通り過ぎてしまうと、また両手を上げて老人の顔を見つめ、きゃっきやと笑ったものだった。その時のルーシーにはタイムが今まで一度も見たことがないような子供らしさが感じられた。彼女の普段の特徴とも言える憂慮の色が浮かんだ早熟な表情、大人びた態度がし

ばらく消えてしまったかのようだった。このように孫から子供特有の元気が思わずほとぼり出るのを見て、リドリー老人はとも喜んだ。だが、彼自身はずっと黙り込んでいた——孫の質問に答えるために口を開く時を除いて。

その夜、リドリーは一度も目を閉じることなく、顔には日頃のやつれた表情に荒々しい目付きが加わっていた。彼は夜の静寂の中で昨日の行為を何度も思い起こしてみたが、あわてて罪を犯してしまった時には考えられなかったほど、今では事の重大さを自覚していた。不思議なことに、もつとも彼を悩ましたものは罪が発覚する恐怖ではなく、あれは卑劣な忘恩行為だったという強い意識であった。これまでリドリーは法律に対する畏敬の念のみならず、道徳上の信念もあつてか、ずっと几帳面な正直者で通っていた。生まれつき立派な感情に駆られやすい男だったのだ。そのため、しっかりと根付いた善の観念と激しく衝突して悪の誘惑になびいてしまうということがどういふことなのか、彼はその事件の当日まで分かっていなかった。自分自身のためだけであれば、窃盗を犯すなんて——その機会と手に入る金額がどんなに大きかったとしても——夢にも思わなかったであろう。本質的に善良な心の持ち主であったがゆえに、孫のために達成すべき目的、素晴らしさを強く感じた瞬間だけ、達成する際の手段の本質が見えなくなっていたのだ。とはいえ、「悪人は一朝一夕にしてなるも

のではない」^(四)と言われる。リドリーの犯罪行為には、その本質を照らして見ると分かるように、卑劣さを軽減される側面がいろいろとあつたのである。

* * * * *

とうとう旅人たちは目的地に到着した。タイムの故郷は小さな市場町で、テムズ河の岸からさほど離れていない。このあたりの川はまだ大都会から遠く離れていたもので、汚れを知らぬ美しい流れを保っていた。この市場町は彼が四十年前に知っていた頃に比べると相当に変化していた。それで、彼の名前を記憶している人が見つかるまで時間がかかった。リドリーは通りをあちこち歩いて疲れたし、好奇心の対象にもなりたくなかったので、宿屋を探すことに決めた。これはすぐに見つかった。宿屋のドアの上には大きな看板がかかっていて、そこには熊かその種の動物が明らかに意図されて描かれており、その下には「アン・ハート」という屋号と、ビールと酒を店内で販売する権利が当該の女性にあることを示す言葉が記されていた。老人は宿屋の女将おかみの名前を見てドキツとしたが、そのやつれた顔には次第に笑みが浮かんできた。「ここだ」とタイムは言った。「ここに泊まろうじゃないか、ルーシー。この宿屋の女将さんは、お爺ちゃんの知り合いなんじゃないよ」

孫は振り向くと、祖父の手をとって一緒に中へ入った。宿屋の酒場には誰もいなかったので、二人は嬉しそうに荷物の包みを質素なテーブルに置き、何世代もの人々が暇つぶしにナイフで削った痕跡を留める低いベンチに腰かけて休んだ。孫が祖父に何かささやき始めようとした、ちょうどそのときドアがさっと開き、宿屋の女将が大急ぎでやって来た。女将は元気のよい、がっしりした体格で、年の頃はティムと同じくらいに見えた。その幾分か血色のよい顔は今なお美しく、善良な女性であることを物語っていたが、宿屋の女将の場合には大目に見なければならぬ特質として、そこには意志の強さを示す跡が見られなくなかった。

「おはようござえます、旦那さん！」と女将は大きな声で言った。「御用件は？」

「あなたの名前はハートの女将さんじゃねえか？」とティムが答えた。

「へえ、さようですが」女将は少し驚いた様子だった。

ティムはほほえみながら、「昔はアン・ヘブドンという名前だったんじゃない？」と尋ねた。

「旦那さん、さほど間違っちゃいませんよ、その点じゃ。けど、どうしてまたそれを御存知で？ 話しぶりからして、このあたりの方じゃなさそうですが」

「俺のここと、憶えてないかい？」とティムは言った。「ティム・

リドリーって男と知り合いじゃなかったかね？」

「あれまあ！ ティム・リドリーかい？ そういや、そうだね。まあ、そんなこと誰に分かるっていうんだい？ まあ、ティム、そういう風の吹き回しだね？ たまげたねえ、あなたの顔を見ても分からなかったよ、ホントに！ で、こっちのおチビさんは、あなたの子供かい？」

「孫だよ」とティムは答えた。

「あれまあ、ぶつたまげたねえ！ そうか、そうか、あたしら、年をとつちまつてるからね。さあさあ、こんなとこいなくて、特別室の方に来てちょうだい！ まあ、ティム・リドリーかい、誰が信じるかね？ さあ、おチビさん、手をつなごうね。ああ、リドリーさん、大きな変化がいろいろあったんじゃないよ。かわいそうに、うちの亭主もずいぶん前に死んじゃったね。この町にや、あなたの仲間も一人も残っちゃいねえよ。こりゃ、大変、大変だ！ さあ、おいでおいで」

それから女将はのべつ幕なしに話し続けた。実を言うと、彼女とティムは昔はいい仲であった。事実、夫婦の契りを結ぶ寸前まで行っていたのだが、当時は二人とも非常に貧しく、そうした状況では色々物入りな現実生活の方が、結局は恋愛感情よりもはるかに重要だと分かったのである。そうした真理が理解できれば、ロマンティックな気持ちなど、どちらにとつても押し殺すの

は簡単だった。ティムはロンドンに出て昔の恋人のことをすぐ忘れてしまい、彼女もまた立派な宿屋の主人と結婚したので自活する必要がなくなつたのだ。今、二人が単なる旧友として再会し、それを喜んでいたことは間違いない。というわけで、自分の間はティムと孫が女将の「白熊亭」に滞在すべく、すぐさま取決めがなされた。

さて、たらふく食事をとつたあと、リドリーと孫は長期にわたつて抱いていた願いをかなえるため、本物の緑の野原を見に散歩に出かけた。ルーシーは今まで一度も見ることがなかつたので、美しい自然に対して無我夢中になつた。時は初秋の頃で、樹木は豪華絢爛な衣裳をまとい始めていた。夕陽の赤い光線が広大な牧草地を横切るように照らすなか、老人と幼子は長い列をなす葉の茂つた栗の木の下を通りながら、川辺に沿つてぶらぶらと歩いた。しだれ柳もあちこちに見える。こちらの浅瀬で背の高いイグサが群生しているかと思えば、あちらの別の場所では滑らかな、ピロイドのような芝草が流れの遅い川の水際までゆるやかに傾斜している。この小川は深まる夕焼けの光を鏡のように反射させていたが、川岸の近くは緑樹の陰で暗くなつていた。時々どこか近くの雑木林からピーピーと鳴くツグミの声が響いて来たかと思えば、くちばしが山吹色のクrouタドリ^(五)がぴゅーっと飛んで行つた。それ以外に聞こえる音といえは、小川のさざ波、栗の

木の枝をそよがせる夕暮れの涼しい微風^{そよかぜ}、そして犬の遠吠えや牛がモーモー鳴く声だけだった。ティムは周囲に広がる美しい風景を楽しもうとしたが、それは無理な話だった。心おだやかではないらなかつたのだから。ルーシーも同様に黙り込んでいたが、それは祖父とは違う理由からである。広々とした空、大きな牧草地、まばゆいばかりの夕焼けは思いがけないものだったので、彼女は恍惚状態になつていた。時たま彼女から深い溜息がもれ、目は一度ならず涙できらりと光つた。

そのような夕暮れ時を、二人はテムズ河の兩岸をぶらぶらしながら、何度も過ごした。しかし、一ヶ月が経過し、すでに二人はわずかな金の蓄えもあらかた使い果たしていた。リドリーはもう一度かつての商売を始めようと真剣に考えた。ルーシーの体調が全然よくないことは一目瞭然だったので、孫娘のために収入源を得たいと思つたのである。都会から田舎へ移つたことで最初は子供の健康にとても効果があつたように思えたが、それは初めての二週間のことで、彼女は取り戻した健康をすぐまた失い始め、体が見えて弱りだした。善良なハートの女将さんは、「好転する見込みがあるじゃないか」と言つて、老人を励ました。「あれは興奮しすぎたあとの反動で、おチビさんの体もすぐ回復するに決まってる」と言われたティムは、首を横に振りながら、ため息を悲しげにつくだけだった。

今の彼には昔の面影が全然なかった。犯した罪を秘密のままにしておくことで、日毎に精神をくじかれる感じがした。もし唯一の希望であるルーシーが——この子の幸せは、今までやって来たこと、耐え忍んできたことに対して期待しうる唯一の償いなのだ——そのルーシーが奪い去られることにでもなれば、残りの人生なんて何の価値があるだろうか？ 彼は田舎屋を借りて再び靴直し屋になった。ちよつとした贅沢な品が孫のために手に入るなら彼はどんなことでもしたし、優しい心と器用な手で孫のためにできることなら何でもした——が、それでも彼女は元気がなくなってしまうた。小さな体は日に日に衰弱していたのだ。彼女は質問に答える時はいつも「田舎は楽しいからとても幸せよ」と言っていた。三ヶ月が過ぎると、もう外出できなくなった。冬が到来し、霜と雪が周囲の風景をおおい隠した。「このあたりはまた去年のように緑になるかしら」と彼女はティムに尋ねた。また川の土手をぶらぶら歩いたり、お花を摘んだり、ピーチクパーチク鳴くツグミやクロウタドリの声が聞けるかしら？ また滑らかな草に寝そべったり、川辺で身をかがめると、ふわふわした雲が滑らかな澄んだ川の底を船のように進んで行くのを見れるかしら？ クリスマスがやって来て、そして行ってしまった。新年の最初の二ヶ月も荒れ狂う嵐とともに過ぎ去り、それから空は穏やかになった。また今年も野原は緑になり始め、三月と四月の雨で木々

の蕾や春の花々が息吹いた。そのあとはぼかぼか陽気の長い一日となり、川の土手には黄金色の花が咲き乱れた。しかし、悲しいかな、ちっちゃな手が花をつかんだり摘んだりして、喜びのあまり打ち震えることはもうなかった。初めての経験ということでも神々しく見える幾千もの美しいものに対して発せられる、いかにも子供らしい、かわいい喜びの声も聞かれなかった。というのは、ルーシーの小さな手は冷たくなり、声は永久に沈黙し、その墓に射す太陽の光は黄金色の花に吸収されてしまっていたからである。

* * * * *

老人は孫娘の死に大変なショックを受けた。重病になって長い床に就き、何もできなくなった。何もやる気がしないのだということに幼なじみのアン・ハートは気づいていた。こうして無為な時間を長く強いられると、ティムは肉体的な苦しみよりも良心の呵責の方にはずと悩まされた。彼はごく普通の精神の持ち主だったので、ずっと気がとがめていた自分の犯罪に対する当然の報いとして、孫を失ってしまったのだと考えずにいられなかった。それで、体が回復したならば、悪徳の償いをするためにできるだけのことをしようと、彼はしばしば心の中で誓ったものだ。

ティムは生まれながら強靱な体質だったので、アン・ハートの手厚い看病もあつて最後には回復し、日々の仕事を再開できくぐらいになった。とはいえ、精神的に受けた打撃からも明らかに彼の死期は早まりそうに見えた。ルーシーと一緒にロンドンを抜け出してから、ちょうど一年が経過した。一年前も彼の顔はやつれて青白かったが、今はその時以上にひどくなり、まるで常に心配事があるかのように視線が右に左に移る、その落ち着かない目は不安な心の状態を示していた。彼の生来の陽気さと機嫌のよさは、苦勞と悲しみに満ちた長い人生の中でもわずかに残っていたが、それも今では完全になくなってしまった。

彼は隣人たちと会うことも話をすることもできるだけ避け、朝から晩までひっきりなしに働いた。この疲れはてた老人に深く同情していた善良な人たちは、いつも喜んで仕事を持ってきてくれた。しかし、たとえ彼がそうしたくても、隠し事などしないで彼らと自由に付き合うことはできなかった。なぜなら、心に重くのしかかっていた秘密のために、彼は常に不安で疑い深くなり、正直な村人たちから単刀直入に質問されるのを何よりも恐れていたからである。

彼が田舎屋から外へ出ることはめつたになかった。ただし、日曜日だけは例外で、その日は村人たちが動き出す前に早起きして教会墓地まで行き、ルーシーの墓のそばに一時間ほど座つてい

た。老人は芝におおわれた土饅頭どまんじゅうの上に身をかがめ、絶望と悲嘆のあまり涙にむせんだ。そこは粗末な墓石とともに孫娘が安らかに眠る場所である。お墓の周囲の芝草の間にはヒナギク(2)がたくさん咲いている。ティムはヒナギクを見て嬉しかった。ここは二人と一緒に散歩した場所であり、ここに咲いているヒナギクを見るのがルーシーの楽しみだったことを思い出したからである。日曜はいつも、彼は早朝の太陽の光を浴びながら、この場所に座つていた——教会の最初の鐘が鳴って、みんながすぐにやってくるから、これ以上ぐずぐずできないと分かるまで。その時間になると彼は立ち上がり、ひと握りのヒナギクを摘み、家に持ち帰って水に浸し、最後の花びらが落ちるまで大切に面倒をみてやつた。

五年間、ティムは靴直しの仕事に精を出し、生活必需品でさえ買い惜しみ、できるだけ節約して金を貯めた。その甲斐あつてか、今では八ポンドが貯まり、あと必要なのは二ポンドだけとなった。毎晩、仕事を終えたと——ローソクに火をつけることさえしなかったで、それはいつも日没時であつたが——彼は宝物をしまつている引出しの所へ行き、それを取り出しては小銭の山を満足そうに眺めた。ティムの場合、その満足はもともと気高い感情があつたがゆえに生じたものである。それは普通の守銭奴がもつと多くの金額を目にしても感じないほどの大きな満足であつた。

彼の心にはいつも一つだけ恐怖が宿っていた。それは自分の死によって計画が頓挫してしまい、苦勞してきたにもかかわらず償いをするのができなくなってしまふのではないかという不安である。そのことを考えると恐ろしくてたまらず、彼はしばしば真剣に考えた——自分が突然死したとしても、計画ができるだけ実行されるように、このことを誰か友だちに伝えておくべきではないかと。信頼が置ける唯一の人物は「白熊亭」の女将だけが、伝えたりすると彼女の疑いを招くのではないかと思い、自分の遺言執行人になってくれと頼むのに二の足を踏んだ。秘密をすべて彼女に明らかにすることは絶対に無理だったからである。

身を粉にして働いた年月も今では六年目となっていたが、ティムは日に日に体力がなくなっているのを感じていた。ある日の午後のこと、作業していた彼は実際に死の危険が目の前に迫ったと感じ、ハートの女将に宝物の話をして、目標を達成する前に死ぬようなことがあれば、お宝がちゃんと目的地に届くように取り計らうことを約束してもらおうと思った。運がいいことに、ちょうど決意を固めたとき、仕事場の戸口が人影で暗くなり、彼が考えていた人物がやって来た。

「こんにちは、リドリーさん」と、その陽気な人物が声をかけた。「近頃はあんまり村人たちに顔を見せてくれないね」

ティムはわずかに顔をほころばせ、古靴の底をハンマーでたた

き続けた。

「そうさな」彼の弱々しい声は震えていた。「外出する時間があるまりないんでね」

「時間がないって！ まあ、悲しいねえ、どうしてお前さんみたいに働く必要があるんだい？ 身代でも築くつもりかね、ティム？」

ティムはしばらく黙っていたが、やがて女将の顔を見上げて真剣に答えた。「ハートの女将さん、ちよいと座ってくださいませんか？ 少し話したいことがあるんだ」

「何でも言っとくれ、ティム！ お前さんが口を開いてくれて、あたしは嬉しいよ、ホントに」

ティムは腰を上げ、お金をしまっている引出しの方へ行った。それから全部を取り出して、びっくり仰天した女将の目の前のテーブルに置いてみせた。

「これだけ持つてながら、あんな生活をしてたんかね！ まさか、お前さんが守銭奴とは思わなかったよ、ティム」

「聞いてとくれ、アン」と、リドリーは片手で金をおおいながら言った。「自分のために貯めたんじゃないやねえんだ。これは別の人のもんでな。お願いを聞いてやるって約束してくれるかね？」

「ああ、もちろんするさ」と女将は答えた。「できるだけのことにするよ」

「簡単なことさ。俺はロンドンの紳士に十ポンドの借りがある。これは俺の稼ぎから貯めた八ポンドだ。で、十分な金になって、その紳士に送れるといいんだが、その前に俺が死ぬようなことになつたら、しかるべき所に届くよう取り計らってくれんかね？これが住所だ」と言つて、彼は紙切れを渡した。

アン・ハートは驚きのあまり声も出なかった。

「もつと前にどうして話してくれなかったのさ。何でも話せる友だちつて思わんかつたんかい？ すぐ仕事をやめて特別室に来ておくれ。そうすりゃ、お前さん、今日のうちに残りの二ポンドをあげるから。たとえ素寒貧になつても、あたしが何とかしてやるよ」

ティムは首を横に振つた。アンは譲らなかつたが、老人もひるむことなく固辞した。とうとう女将が根負けし、秘密はちゃんと守るからね、願ひもかなえてやるからねと約束し、なおも驚きの声をあげながら立ち去ろうとした。

「でも、まあ、心配しなさんな、ティム」と女将は去り際に言つた。「お前さんはまだ何年も長生きするよ。あたしを見てごらん。お前さんと同い年だけど、あたしが死にそうだなんで、そんなことと思ふまい」

それからというもの、リドリーの心は軽くなり、もうしばらくは元氣を出して頑張つてみようという氣になつた。一年ちよつと

経つと目標も達成でき、十ポンドが貯まつた。目の前に積み上げた一ペニー銅貨、六ペンスの白銅貨、一シリング銀貨(七)の合計がそれだけの金額になるなんて信じられなかつたので、彼は何度も何度も数え直した。そして、お金を「白熊亭」の女将の所へ持つて行き、本物の金貨と交換してもらつた。金貨十枚の方が持ち運びしやすいのは言うまでもなく、見た目も申し分なかつた。一日たりとも待てなかつたので、絶対そうしておくれと言つてきかない女将から旅費を借り、彼はロンドンに向けて出発した。

彼は正午頃に華の都に着き、喜びと不安に打ち震えながら、速足で目的地へと向かつた。ページ氏はまだ昔の事務所にいるだろうか？ いるとしても、自分を受け入れてくれるだろうか？ この建築家が親切であることは身に染みるほど分かつていたので、我が身を彼の手に乗ねることに何の怖れも感じなかつたが、あんな卑しい忘恩行為を働いたのに、相手の前に立つて罪を犯したことを今から白状するのかと思うと、彼の決心は何度もぐらついた。しかしながら、絶対に白状しようと決意を固めた。建築家の事務所が入っている建物まで来ると、昔の職場の入口が見えない名前が書かれていた。心苦しくなつて息もほとんどできなくなり、弱々しい震える足取りで階段を上るのにずいぶんと時間がかかつた。やつと建築家の事務所に着き、窓ガラスにページ氏の

名前がまだあったので、彼の口からは「ああ、ありがたい！」という声が出た。体力と決意を取り戻すべく、彼はしばらく廊下の壁に寄りかかつてから、扉をノックした。「お入りください！」という元気のよい大きな声が聞こえたが、それはまさしく建築家自身の声であった。

ティムは中に入り、もよりの椅子に倒れ込んだ。ページ氏は机から——お金が置いてあるのを彼がかつて見た例の机から——顔を上げたが、その顔には驚きの表情が浮かんでいた。彼の方はほとんど変わっていなかった。変わった所があれば、それは少しだけ白くなった髪とヒゲだけだったが、リドリーの場合は少しも記憶にないように見えた。二人とも数分のあいだ黙っていたが、建築家の方は物問いたげな表情でじつとリドリーを見ていた。

「ページさん、俺のこと、分かりますか？」と、ついにリドリーが口を開いた。彼は声がしわがれていたため、意のままに話すことができなかつた。建築家は首を横に振った。

「俺はリドリー、かつて下の階で働いとつた、とても親切にしてもらつた靴直し屋です。盗みを働いて、恩を仇で返しちまつた奴ですよ」

リドリーは自分の息がとだえてしまうことを怖れているかのようにならざり、早口でしゃべつた。ページ氏は驚いた様子で突つ立っていたが、次第に落ち着きを取り戻し、あわれみ深い、優しい表情に

なつた。

「知つていたよ」と彼は低い声で答えた。

「でも、俺は返しに来たんです」とティムは言つて、待ちかねたように金を机の上に置いた。「はい、受け取つてください！受け取つて！ それでもつて、お願いですから、俺のことを赦すつて言つてくださいえ！」

「ずいぶん前から赦していたよ、リドリーさん。出来心だといふことは分かつていたからね。罪の償いはもう十分にしたじゃないか。この金をまた受け取つて、お孫さんのために使いなさい」

「ああ、悲しいことに、あの子は亡くなりました！ 死んだんですよ！ この金をどうか受け取つてください。まだ泥棒だと思つたままで死なせたいんですか？ 俺を絶望の淵に追いやらないでくださいえ！」

そう言つと急に立ち上がり、ティムはよろけながら部屋から出て行き、階段の方へと急いだ。老人の顔色と興奮に衝撃を受けたページ氏も立ち上がつて追いかけた。しかし、ちよつと部屋の扉まで行つたところで、すさまじい音が階段から聞こえてきた。それはリドリーが階段から落ちた音で、建築家が行つた時には、すでに老人は死んでいた。

【訳注】

- (一) ロンドン市長と市会が自治を行っている英国の金融・商業の中心地で、テムズ河北岸の約一平方マイルの地域。若い頃に一旗あげようとしてロンドンに出て大成功を収めた人物の伝承としては、十三世紀頃からある「ディック・ホイットティングトン」(Dick Whittington)の話が有名。彼は奉公が辛くて飼い猫を連れて逃げ出したが、市内から響いてきたボウ教会の鐘につられて引き返し、その猫の活躍によって巨万の富を得て、のちに三度ロンドン市長になった。
- (二) 主人公と娘の早婚を考えると、また「この市場町は彼が四十年前に知っていた頃に比べると相当に変化していた」とあることから、六十年は作者の勘違い。
- (三) 英国の一ポンド金貨。ヘンリー七世の時に初めて造られたが、ここでは一八一六年の金本位制施行により登場した新しい金貨のこと。
- (四) 出典は古代ローマ時代の詩人ユウエナリス (Decimus Iunius Iuvenalis, anglicized as Juvenal, c. 55-c. 140) の『諷刺詩 (Satires)』にある諺 (Nemo repente fuit turpissimus)。
- (五) 大型ツグミの一種で、雄は全身と足が黒く、嘴と喉が黄色、雌は全体が褐色。マザー・グースの有名な「六ペンスの唄 (Sing a Song of Sixpence)」にも出ている。
- (六) ヒナギクは墓地によく生えている。春の最初に見たヒナギクを踏みつけないと、来年はその人が愛する人の上にヒナギクが生える(つまり死ぬ)という言い伝えがある。
- (七) ヘンリー七世の時代に鑄造されて一九四六年まで続いた銀貨(十二ペンス＝一シリングで、二十シリング＝一ポンド)。

【作品について】

本邦初訳。ジョージ・ギッシング (George Gissing, 1857-1903) はメンチェスターのオーエンズ・カレッジの最終学年を迎えた十八歳の時に盗みを働き、退学後の翌一八七六年九月にアメリカへ渡り、マサチューセッツ州のウォルサムで高校教師になったが、一歳年下の生徒 (Martha Barnes) との女性問題から数ヶ月で辞職した。シカゴに移ったギッシングには生活資金が五ドルしか残っておらず、一週間分の下宿代を払うと手持ちは数十セントになった。しかし、そのなけなしの金で紙とインクを買い、『シカゴ・トリビューン』紙に投稿するために処女短篇「父の罪 (The Sins of the Fathers)」を二日で書き上げた。そして、一八七七年三月一〇日の土曜増刊号 (Saturday Supplement) に掲載してもらい、十八ドルを稼ぐことができた。それに続く短篇が三月三十一日に掲載された「安らかに眠れ (R.I.P.)」で、四月二四日の土曜増刊号に出たのが本短篇「高すぎた代価 (Too Dearly Bought)」である。